

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 教育学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	萩原 大河
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation)			
インクルーシブ体育の授業における教師の指導と知識に関する研究 —指導に関する実態把握と特別支援教育の専門性を有する教師による 体育の交流学习の経験をもとに—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主査 (Name of the Committee Chair)	教授	木原 成一郎	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	七木田 敦	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	大後戸 一樹	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、インクルーシブ体育の授業における学習指導の実態を把握し、計画から指導場面で教師が有している知識を明らかにすることを目的とした。論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>序章では、インクルーシブ体育の授業に関する研究動向をまとめ、本研究におけるインクルーシブ体育の授業を、教師が時間と空間と学習内容を共有している障がいのある児童と障がいのない児童の交流を促し、適切に開発された教材を用いて学習指導を行う体育授業と定義した。</p> <p>第1章では、教師の力量に関する研究動向をまとめ、体育科教育において教師の知識を把握するためには、Shulman (1987) の知識基礎の概念枠組みを適応することが望ましいことを論じた。</p> <p>第2章では、学校の組織構造の観点からインクルーシブ体育の指導体制を類型化し、それぞれのタイプ別に小学校教員の授業実践の評価の特徴について明らかにした。障がいのある児童が日常的に通常の学級で体育授業を行っている地域を対象として質問紙調査を行った。分析の結果、通常の学級の担任と特別支援学級の担任とがティームティーチングを実施する共同指導は児童同士の相互理解が高く、児童の不満が低い指導体制であることが明らかとなった。また、共同指導を実施する教師は、交流及び共同学習を行う通常の学級での豊富な指導経験を有していることが明らかとなった。</p> <p>第3章では、第1に、インクルーシブ体育の授業を実践してきた教師Aが、どのようにして障がいのある子どもと障がいのない子どもが共に学ぶ授業を実践し研究するようになったのかを、教師Aのライフストーリーの記述から明らかにした。第2に、教師Aを対象に、インクルーシブ体育の授業における計画から指導場面の一連の過程で発揮される知識を明らかにした。</p> <p>教師Aは、教員養成時代に大学で出会った恩師と共に、障がいのある子どもと障がいのない子どもが共に学ぶ授業を目指すために継続的に学術研究を行っていた。そして、特殊教育から特別支援教育の転換期に大学院の修士課程に進学した。修士論文のテーマは、これまでの教師A自身の実践や研究で課題として明らかになっていた、共に学ぶ体育の授業の中で起こる障がいのある児童の逸脱した行動と、その行動に対応する障がいのない児童による解決のための行動に関する実態把握であった。</p> <p>インクルーシブ体育の授業における教師の知識に関しては、まず、教師Aが主として指導したインクルーシブ体育の授業の録画ビデオによる再生刺激法を適用したインタビューを実施した。次に、インタビューの内容をすべて文字にしたトランスクリプトを作成し、質的データの分析方法であるSCAT (Steps for Coding and Theorization) を施した (大谷, 2019)。その結果、通常の学級の児童と障がいのある児童の関係性の形成に関わる教師Aの指導に、教師に特有な知識であるPCK (pedagogical</p>			

content knowledge) が確認され、両者の合意形成のための相互応答性を図ることを目的として教師Aが橋渡しの役割を担う知識を使用していたことが明らかになった。

終章では、研究の成果と課題を論じた。

本論文は、次の2点で高く評価できる。

1. 第1に、インクルーシブ体育の授業において教師の知識の内容が明らかにされた点である。1事例ではあるが、一般的な体育の授業と比べてその研究が不足しているインクルーシブ体育の授業の計画と指導に関する教師の知識を明らかにしたことは、インクルーシブ体育の授業を実現するために育成すべき教師の知識について新たな知見を提供したといえる。
2. 第2に、特別支援教育の専門性を有する教師Aを対象としたインクルーシブ体育の授業に関する事例研究の方法として、ライフヒストリー法と再生刺激に基づく発話のSCAT分析法を用いた点である。ライフヒストリーから得られた、教師Aがどのようにして「障がいのある子どもと障がいのない子どもが共に学ぶ授業」を実践し研究するようになったかの結果は、通常の学級の児童と障がいのある児童の関係性の形成に関わる教師Aの指導に、教師が橋渡しの役割を担う知識が使用されていたというSCAT分析法の結果を裏付けるものである。両者の結果には一貫性があることから、これらの知見は説得力をもつことになる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 5年 2月 17日

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)